



みんながほっとできる、地域の居場所！

茨木市「子民家よってこ食堂」

原田茂樹さん・下田平敬子さんの思い



お話し
いただいた方

子民家よってこ食堂 原田茂樹さん 下田平敬子さん

茨木市こども育成部こども政策課

子ども・若者支援グループ 馬場浩行さん 山田美沙さん

インタビュー・ライター：大阪大学大学院経済学研究科 大阪府こども食堂ネットワーク 西山
撮影：認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 圓藤

地域のなかに、地域みんなが集まれる場所をみんなでつくる。

子民家よってこ食堂は、地域みんなの手作りの手作りです。こども政策課の馬場さんと山田さんとともに、みんなの思いが詰まった居場所づくりの軌跡を伺いました。



みんなの思いが詰まった居場所

「子民家よってこ食堂」を始めたきっかけを教えてくださいませんか？

原田さん

子民家よってこは、社会福祉協議会が進めていた、各小学校区にちょっとした地域の居場所を整備したいというプラットフォーム事業に耳原（福祉委員会）も手を挙げたことがきっかけで、当初は子どもというよりも、高齢者の外出支援のイメージで進めていました。場所は、もともと自治会が持っておられた「老人憩いの家」という場所が「空いてるよ」ということで、整備して使わせてもらうことにしました。そうやって準備をはじめた頃、主任児童員をしている下田平さんから「こども食堂ができたらいいな」という相談を受けました。こども食堂への熱い思いは、下田平さんから、お話ししてもらいましょう！



下田平さん 私は今は主任児童委員をしています。もともと、児童養護施設で勤務していたこともあって、ずっと子どもに関わってきた経験から、今でいう子どもの居場所づくりをしたいという思いがありました。何かしたいと思って、私の子どもが小学生の時に、誰でも気軽に参加できるドッジボールチームを結成しました。今でも土曜日に練習するんですが、参加している子どもたちの中には、朝ごはんや昼ごはんを食べているのかわからない子がいます。そういう子が気になって、自宅でおにぎりを作って、練習後に渡したりしていたんですが、そういう方法だと子どもたちも遠慮しますよね。そういう地域での活動を通して、子どもたちが気兼ねなく過ごせるような場所が欲しいと思っていました。実際に、つながりのあった社会福祉協議会の方や大学の先生、学生さんと一緒に、箕面のこども食堂まで見学に行ったりもしていました。けれど、場所の問題などもあって、子どもの居場所をつくるというのは、なかなか実現できませんでした。そんな時、原田さんが地区福祉委員長になられて、場所を確保して実現することができました。

原田さん 子民家よってこは、地区福祉委員会の活動ということもあって、高齢者向けのお茶サロンの予定でした。「老人憩いの場」には、台所もないし、お湯を沸かすティファールぐらいしかありません。でも、僕も子どもとの関わりの方が長く、子どもが大好きなんですよ。市役所に勤めているときは、長く茨木市内のキャンプ場の管理運営をする仕事に携わっていて、大学生や子どもたちと関わってきました。なので、下田平さんから相談された時、貧困対策ではない居場所ができればと思いました。そこで、オリックス宮内財団に応募して、こども食堂のための費用を準備しました。限られた費用ですから、地元の工務店の協力も得て、地域の人とも協力して作業した手作ります。その当時から、追手門学院大学の古川先生とつながりがあり、ゼミ生が活動に参加してくれています。「子民家よってこ」という名前も、当時6年生の子が「古民家」の「古」を子どもの「子」にした「子民家」という提案をしてくれて、「よってこ」は、ゼミ生が「よっといで」じゃなくて、自ら行くような感覚で来る場所になってほしいという思いを込めて「よってこ」という造語を作ってくれました。合わせて「子民家よってこ」になりました。すごいと思いませんか(^ ^)！

みんなでつくる、みんなの居場所

「子民家よってこ食堂」はどのように運営しているのですか？



原田さん スタッフは、下田平さんのお友達関係が主たるメンバーで、活動開始当初から8人くらい来てくれていて、今は10人くらいになっています。時々、(自治体の)広報誌で載せていただいたら、社会福祉協議会にお手伝いで行きたいですという連絡が来ることもあって、参加していただたりもしています。

下田平さん これまでの関係の中で、周りの友人などにはずっと、何かするときは手伝ってなと言っていたので、そういう仲間が集まってくれています。みんな、だいぶ年齢が高くなってきましたが、自分たちが好きやから行くと言って手伝ってくれています。今ではもう、スタッフの方が「私が元気もろてんねん」と言って来てくれています。多いときは、1回の開催で150食分、3升炊を2回炊きます。電気では間に合わないので、ガスの炊飯器を買ってもらいました。野菜なんかは、近くの農家の方が毎週「子どもに食べさせて」と持ってきてくださいます。



原田さん

僕がいつも仕事終わりの5時頃行くと、下田平さんを中心に、卵焼いてる人はだいたいこの人やなとか、炒めもんはこの人、フライもんはこの人、切る人、混ぜる人、自然とみんなやってくれています。古川先生のゼミ生もゼミ時間を利用して毎回参加してくれます。ゼミ生は、毎年4月になるとメンバーが入れ替わります。初めは、みんな携帯電話を触るんで、スタッフがいつもぼやくんですが、回を重ねると、作るのを手伝ってくれたり、子どもたちと親しくなって、古民家よってこの前にある児童遊園で、一緒にドッジボールやサッカーをして遊んでくれるようになって、なくてはならない存在です。



みんなが安心して過ごせるように

「子民家よってこ食堂」の様子を教えてくださいませんか？

下田平さん

貧困対策のための場所にはしたくないと思っています。最近、地区の小学校2年生が毎年、地区探検という取り組みで、必ずよってこに来てくれるようになりました。来てくれた時には、子どもたちに「子民家よってこ」について直接話をして、伝えています。地区探検を受け入れた翌週や翌月は、いつも以上に多くの子どもたちが来てくれるんですよ。地区探検を受け入れることで先生ともつながりができています。先生も来られている場所ということで、親御さんも安心されますし、先生も学校とは違う子どもたちの顔を見れる場所にもなっていると思います。中学校の先生も来てくれています。

原田さん

僕も貧困とはセットにしたくないと思っています。最初の頃、「すみません、うちの子、よってこ食堂行きたいって言うんですけど、うち普通の家なんですけど、行っていいですか？」とお母さんから電話がかかってきたことがありました。あれは素朴な質問だったと思います。こども食堂は最初の頃のイメージで貧困とセットになるじゃないですか。だから、僕は下田平さんからこども食堂をやりたいと相談された時、こども食堂という名前ではなく、よってこ食堂にして、誰でも来れる、みんなでわいわいできる、地域に開いた場所にしたいと思いました。100人来て、そのうちの10人でも5人でも孤食や食べるのに困っている子がいれば、それでいいと思っています。来ている子にいちいち根掘り葉掘り、生活の状況を聞くことはありません。ゴンタの子はゴンタやし、優しい子は優しいし、かわいい子はかわいい、みんな同じ子どもたちです。レッテル貼られるような場所には絶対したくない、みんなの居心地のいい場所にしたいと思っています。



子どもとのつながりを感じる



「子民家よってこ食堂」の子どもたちの様子を教えてくださいませんか？

下田平さん 「おいしかったです」と付け加えてくれる子が最近多いんですよ。本当にうれしいなと思います。

原田さん 別にルールでもないのに、「おいしかった」と言ってくれるので、校長先生が来られたら、子どもたち「学校で、すごい頑張ってるんじゃないですか？」と聞いたりしますが、「そんなこともないけどな」とおっしゃるんですね。最近は食べてるときの立ち歩きもなくなって、子どもたちも落ち着いています。子民家よってこには、そういう雰囲気があります。

下田平さん 一番感動してるのは、自分のお小遣いで来る子がいて、小銭に10円玉とか、1円玉を持ってくるんですよ。

原田さん 地域の企業から寄付もいただいているので、無料でもできるんですが、みんなでいろいろ話し合っ、言葉はよくないけど、“施し”ではないからということで、子どもは50円、大人は200円にしています。活動が終わって、会計を数えると、10円玉、5円玉が必ずあるんです。それを見ると、僕はすごくいいなと思うんですね。子どもがちっちゃい財布持ってきてね、払ってる。そうやって、子どもらが持ってきた小銭を数えると、端数までちゃんと数が合うんです。無料ではなくて、お金を払って食べるということは、親御さんにとっても、食べに来てもいいかなという思いにつながるのかなと思います。

地域のなかでみんなが集まれる場

「子民家よってこ食堂」の子どもたちの様子を教えてくださいませんか？

原田さん 結成から9年ですが、でもまだそんなもん？という感覚です。僕たちが活動を始めた頃、茨木市内では5〜6か所のこども食堂が活動を始めていました。でも、まだ連絡会もなく、市の所管もこども政策課と決まっていなかったようにも思います。地域の居場所づくりは、最初の立ち上げにエネルギーが必要です。それが今、市役所の中にも担当者がいて、サポートしてくれていることもあって、茨木市内のこども食堂は29か所（インタビュー時点）に増えています。

これまでの活動で一番苦しかったのは、コロナの時です。お弁当の配布を1年くらい続けたんですが、みんなでわいわい食べる、孤食じゃないというのが値打ちの場所なのに、集まって食べるということが根本的にできなくなって、よってこ食堂の意味ってなんだろうと悶々とした時期でした。お弁当は食の支援にはなったかもしれませんが、お弁当屋さんになるのは違うよなと。その後、会食を復活して、9年やってきて、毎年4月や新学期で、子どもたちの生活リズムが変わっても、やっぱり子どもたちは来てくれます。来てくれる子どもたちを見ると、子民家よってこ食堂へのニーズが変わってないなという感覚があるので、できることをこれからも続けていきたいなと思います。